第03章 — 雷神

01 — 一撃はまだ身体の中にあった

雷神の最初の接触で生じた痛みは、普通の損傷のように消えていかなかった。ロイは胸骨の下の部位を地図のように表示し、炎症が引き、支持繊維が修復される様子を観察できた。しかし速く方向を変えるたびに、身体の左側は、まだ衝撃が内部を移動しているかのように反応した。

イマニは遅延結合と呼んだ。確立した診断名ではなく、観測された現象を表すための仮の言葉だった。外からの衝撃は小さかったが、複数の支持構造がつながる経路に沿って内部振動が伝わった。ロイの身体は外側から来る打撃を防ぐよう設計されている。防御の隙間に入る精密な位相の乱れには備えていなかった。

「一度できるなら、二度もできる」とロイ。

「また触れさせないという選択もある」とイマニ。

「別館には入らなければならないかもしれない」

「なら、立ち尽くして技術で相手を普通の人間にできると願うより、まともな計画を立てて」

評議会は別館上階への立会い付き調査を許可した。ハヴェルは異議を申し立てた。命令そのものは失効しないが、証拠を隠す時間は稼げる。レイチェルが追加書類を準備していると、雷神から公的弁護人へ紙の伝言が届いた。

ロイが道場で会うなら、私は供述する。

拒否することも、実演を受けずに質問することもできた。だが文面は要求であると同時に、始まりかけた告白にも見えた。

02 — 機械のない道場

古い市営体育館は放水堤の近くにあった。木床は何度も張り替えられ、同じ色の板が二枚とない。窓から朝の薄明かりが差し込む。ネットワーク送信機もレプリカント同士を戦わせる闘技場の設備もなかった。

入口では風神が待っていた。彼はまずロイの診療図を調べた。二人の民間証人は高いベンチに座り、独立した医師がロイの状態を紙に記録する。雷神は傷害を狙わない実演に同意し、ロイは身体が不安定になれば即座に停止すると約束した。

ほとんど理性的な取り決めだった。

雷神は両腕をゆるく下げて近づいた。「説明が欲しいのか、復讐が欲しいのか」

「説明だ」

「なら持ってきた装備は使うな。答えがあると錯覚するだけだ」

ロイは手首の小型発信器に目を落とした。電子制御を持つ追跡者なら、局所的に感知と協調を乱せる。しかし外さなかったままではない。封印箱に入れ、証人に封印を認めさせた。

「まだ信用していない」とロイ。

「それでいい。信用は距離の代わりにならない」

雷神は腕の届かない位置に立ち、ロイが姿勢を整えるのを待った。

03 — 人間の電気

ロイはゆっくりした攻防から始めた。左手で押すと、雷神は偶然触れたと見間違うほど軽く腕をそらした。一瞬後、ロイの重心が変わった。叩かれたわけではない。自分の力が意図しない場所へ届いたのだ。

「俺が動き終わる前に動くのか」

「お前が次の動作の意味を決めている間に、私は動いている」

角度、速度、呼吸のタイミングを変えて繰り返した。雷神に目立つ予備動作はない。普通の敵なら命中するはずの二度の攻撃も、男が直前までいた空間を通過するだけだった。

「発勁だ」と雷神。「力を発する。資料では爆発的打撃と訳すかもしれない。便利だが、説明としては足りない」

彼は指二本を練習用の防護板に当て、息を吸い、足と腰から短い動きを発した。板は予想以上に跳ねた。下の圧力計はごく短時間に立ち上がる鋭い衝撃を記録した。

「これは説明できる」とロイ。「関節の協調、衝撃時間、弾性の解放」

「まずはそこからだ」

雷神は同じ距離から二度目の動きを見せた。筋収縮の順序が違う。全体の力は小さく記録されたのに、板の深部のセンサーは大きな局所振動を拾っ

た。表面はほとんど動かなかった。

「伝わる経路が違う」

「お前の身体が最初に気づいたことだ」

04 — 間違った武器

屋外で警報が鳴った。何者かが放水堤上空に無許可の市営ドローンを起動した。誘導信号は旧政府の脅威識別装置に似ていた。ヌルは送信を見つけ、自分が中継器として悪用されないよう受信接続を切った。

ドローンは割れた高窓から入った。照準光が雷神を通過し、ロイで止まった。

一瞬、ロイは昔の追跡のただ中に戻った。手首を上げ、装置が封印箱にあることを忘れ、もう身に着けていない電磁的な答えへ手を伸ばした。

先に動いたのは雷神だった。ロイを押しのけ、ドローンの射出針を木床へ外させ、短い拳打を機体へ入れた。機体は壁で砕け、制御を失った後も回転翼だけが回った。

「俺を助けたのか」とロイ。

「機械がお前を狙った。それだけで暴力が正当化されるわけではない」

警官二人が来て残骸を回収した。証人は中断を記録し、実演は終了した。雷神は供述を申し出て、別館、ハヴェルの保護信託、EDENへ登録されないまま残っていた旧指揮権限を挙げた。

「大臣を守るとは、彼に質問する人間を襲うことだと信じている者がいる。私もその一人だった」

05 — 何もしなかった装置

ロイは雷神の技法だけでなく、装置が無力だったことも記録に残そうとした。実演によって、人間の神経系が並外れたタイミングで力を伝えられることは分かった。しかし、旧護衛たちが語る刀の効果までは示されていない。伝説は誇張かもしれなかった。

建物の外で別の武装ドローンが近づいた。今度はロイが知る局所制御装置を積んでいた。警官が群衆に到達する前の停止を許可する。

ロイは手首の発信器を取り戻し、狙いを定めて局所EMPを放った。ドローンは動力を失って落下した。人々が衝突音から逃げた。

次の瞬間、サービス通路から短い警棒を持った男が警官へ向かって走った。機械的なインプラントはない。ロイは本能的に発信器をそちらへ向けた。パルスは服と濡れた舗装を照らしただけだった。

男は止まらない。

雷神が割って入り、腕を絡めて警棒を落とさせた。頭は打たず、警官が拘束するまで押さえていた。

「効かないと知っていただろう」と雷神。

「知っていた。それでも使った」

「危険の中では、生き延びたときのやり方に手が伸びる。それも人間らしいことだ」

ロイはその比較に礼を言わなかった。昔、別の選択肢が与えられなかったため命令に従った五人の追跡者を思った。自分の中にも、まだ選択になっていない習慣が幾つあるのだろう。

06 — 回路としての身体

その夜、イマニは衝撃の波形を調べた。レイチェルは人間の腕の機械模型と、ロイの損傷した支持繊維の記録を並べた。二人は雷神の技を超自然とは呼ばなかったが、完全に説明できたとも言わなかった。

「あなたの身体は、方向を特定できる大きな外力への防御を前提としている」とイマニ。「短い乱れなら材料の境目を利用できる。人間にも境目はあるけれど、神経系が絶えず調整しているの」

「ニューロンが速いから、強く打てる？」

「厳密には違う。より小さな力を効率よく置ける。何もないところからエネルギーを生み出しているわけじゃない」

レイチェルは「効率」という語で動きを止めた。ヘリウム実験の記録と、練習板の力の波形を横に置く。研究者たちは長い年月、より多くのエネルギーを供給しようとしていた。最良の結果が出たのは、系が利用できる瞬間に同じエネルギーを届けたときだった。

「違う分野を測っていたけど、同じ問いをしていたのね」と彼女。

「どんな問いだ」

「出力が限界ではなくなったとき、タイミングが問題になるとしたら？」

07 — インクの下の名前

エイドリアンは新憲章に基づき、六年計画の消された署名を調べた。独立した文書鑑定士は元の紙の筆圧を比較した。隠されていたのは科学者ではなく、ハヴェルの下で緊急継続性局を管理した公務員だった。

その人物の証言は古い封印供述書に残されていた。部署は実験の失敗を理由に停止を命じられたのではない。認可寿命が最大寿命ではないと示されたため、停止させられたのだ。

「自分が何を主張しているか分かっていますか」と録音の弁護人。

「最大値を測定していなかったということです。我々が試したのは、政治的な上限を生物学的な上限に見せかけられるかどうかだった」

命令者の名前を言う前に録音は途切れた。付録も欠けている。

ロイは二度聞いた。安心などしなかった。上限が人工的だという示唆は、その解除法ではない。希望を必要とする人々は、これまでも果たされない約束を十分に聞かされていた。

しかし失敗した実験と、禁止された実験の違いだけは明白だった。

08 — 雷神の拒否

雷神は護衛を付けず公的弁護人の前に現れた。ロイへの暴行を認め、給料を払っていた私設保護信託を明らかにした。若い兵士だった自分をハヴェルが救ったことを、免責の理由にはしなかった。

「彼が命を救ったのは事実だ。そして、その後私が彼のためにしたことも事実だ」

弁護人は協力証人の保護制度を説明した。雷神は匿名を拒んだ。報復があっても、名前を供述に残すつもりだった。

廊下でロイが近づいた。二人は同じ灯りの下に立ち、どちらも手を上げなかった。

「二度目の衝撃が、まだ理解できない」

「私にも完全には説明できない」と雷神。「使えることと、説明できることは違う」

「学べるのか」

「一部はな。ほかは、自分の限界を感じながら育ってきた身体に依存する」

「俺の身体には学べないと思うのか」

雷神は考えた。「違う形で学ぶのだと思う」

弁護人の端末に連絡が入った。ハヴェルは夜の間に別館を去り、風神も同行していない。裁判所の封印は破られず、文書は残っていた。持ち去られたのは、大臣の刀だけだった。

雷神は目を閉じた。「あの人は、ずっと言いたかったことを、これから武器で言うつもりだ」